

月刊

2018

1  
月号

# みんぱく

特集

ねこ

猫

ネコ



ネコ歩きで世界を横切れば 吉岡乾／エジプトのネコの女神「バステト」 肥後時尚  
猫をかぶった人形たち 井上章一／国芳と猫 津田卓子／野生からペットへ 池谷和信  
黒猫と魔女 小林繁子／成年で絵馬でネコ 内田吉哉

# ネコの魔法

ネコとの出会いは意外に遅く、高校生になってからだ。京浜工業地帯の蒲田で育ったこともあり、それまでネコといえば道を横切るノラくらいだった。

同級生の家に遊びに行った時のこと。彼の家  
の内外には二八匹のネコがいた。そのうちの二匹  
を彼は肩に乗せ、ネコの顔を間近に見せてくれた。  
ご自慢のネコだったのかもしれない。その時、まっ  
たく考えてもいなかったことが僕の身体に起きた。  
目の周りが急に熱くなり涙が溢れてくる。焦った。  
ネコを見て泣いたなど格好が悪くて説明出来ない。  
何とか彼が振り向く前に涙をぬぐった。何に感動  
したのか、大きな瞳にやられたのか、いや、可愛  
さだけではない。どうやら一瞬でネコの魔の手に  
落ちた……もとい、魔力に惹かれてしまったらし  
い。自分と違う生命を身体が震えるほど愛おし  
く感じたことも初めてで、ただただ、衝撃的だった。  
あれから、半世紀近くが過ぎた。現在、NHK  
BSプレミアムで「岩合光昭の世界ネコ歩き」と  
いう番組を作っている。これまで五年間で訪れた  
国は四〇カ国ほど。長年、ネコを探していたら、  
基本的にヒトの住むところには必ずネコがいると

## 岩合光昭

プロフィール  
1950年東京都生まれ。動物写真家として  
世界中で野生動物を撮影し、1986年には  
日本人写真家として初めて「ナショナルジオ  
グラフィック」誌の表紙を飾る。ネコの写真  
も絶大な人気をほこり、「ねこ」「ねこ歩き」  
などの写真展が全国で開催される。写真集は  
『おきて』（小学館）、『ふるさとのねこ』（クレ  
ヴィス）など多数。

考えるようになった。北はノルウェー、南はペルー  
まで、ネコが暮らす村や町を訪ねている。世界遺  
産に登録されている土地や建物の中でも、そこで  
暮らすネコを見つけて撮影をする。撮影許可を取  
得するのが難しい場所でも、「ネコ」というと不  
思議と許可が下りてしまうことが多々ある。それ  
がネコというものなのかもしれない。

撮影時は、ほとんど這いつくばっている。ネコ  
の目線になるために、その高さでカメラを構える  
からだ。その甲斐もあるようで、番組を観てくれ  
るネコが多く、制作ディレクターは世界一ネコ視  
聴率の高い番組だと豪語している（笑）。地面す  
れすれにカメラを構えることで、土地の色や質が  
見えてくる。道や建物の建ち方、ヒトの足元も見  
えてくる。ネコを通して村や町が見えてくる。

先日、「ネコは家畜化されたのではなく、自ら  
ヒトに近づいて来たのではないか。何故なら遺伝  
子が変化した形跡がない」と学者が発表した。ネ  
コは野生を残しながら、私たちと寄り添う。ヒト  
の思い通りにならないネコに、会うたび魔法をか  
けられて、これからも付き合っていくのだと思う。

## 月刊 みんなぱく

1月号目次

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                            |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/><b>ネコの魔法</b><br/>岩合 光昭</p> <p><b>特集 ねこ猫ネコ</b></p> <p>2 ネコ歩きで世界を横切れば<br/>吉岡 乾</p> <p>4 エジプトのネコの女神「バステト」<br/>肥後 時尚</p> <p>5 猫をかぶった人形たち<br/>井上 章一</p> <p>6 国芳と猫<br/>津田 卓子</p> <p>7 野生からペットへ——ネコと人の共存を求めて<br/>池谷 和信</p> <p>8 黒猫と魔女<br/>小林 繁子</p> <p>9 戊年で絵馬でネコ<br/>内田 吉哉</p> | <p>10 ○○してみました世界のフィールド<br/><b>聴導犬は人生のパートナー</b><br/>飯泉 菜穂子</p> <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相<br/><b>狼男</b><br/>池上 俊一</p> <p>16 新世紀ミュージアム<br/><b>記憶の場所——寛容と社会的包摂</b><br/>ANFASEP 記憶博物館「繰り返されないために」<br/>関 雄二</p> <p>18 手芸考<br/><b>服のパターン、手芸のパターン</b><br/>平芳 裕子</p> <p>20 ながなんちゃ<br/><b>名は星をあらわす (?)</b><br/>三尾 稔</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|



犬と猫。わたしたちにとって身近な動物の二大スターのうち、干支になったのは犬だけだ。しかし今年は猫派の方のご要望にもお応えし、干支シリーズの番外として猫をとり上げる。一二年前の本誌犬特集と並べ、犬派の方にも猫派の方にも楽しい新年をお迎えいただきたい。

【写真上から】

張り子人形 猫達磨 (日本、H0014244)

影絵人形芝居用人形山猫 (インドネシア、H0067796)

切り絵 黒猫 (中国、H0170454)

## ネコ歩きで世界を横切れば

吉岡 乾 民博人類基礎理論研究部

「飼い犬は自分のことを人だと思っている。飼い猫は人のことを大きな猫だと思っている」

どこからとなく聞こえて来た言説であるが、つい膝を打ってしまっ直観ではないか。

世にも可愛い猫たちは、いつだって適度な距離を保ちつつ、人の生活の端々に姿を見せている。地点も時点も問わずにだ。だからこそ、犬ほど一貫していない、さまざまなイメージでとらえられてきているのだろう。

### 吉祥か凶兆か

例えば「猫たちがいないと願ひもがのさばる (Quo non versantur cati, mures dominantur: ニテ

駅長見習いとともに、人を呼び続けている。猫による加護は、はるかむかしのエジプトでも折り紙付きた。

一方で、日本では黒猫が行く手を横切ったら凶兆とされ、遠くバキスタンでも「猫が横切る (Qinonana: ウルドゥー語)」のは旅の不幸を告げるジンクスになる。由緒正しいセルビアの吸血鬼は、墓猫などの不浄な生物が跨ぐことで、その死体が化けて出ると伝えるし、同じくスラヴ語圏で「彼らのあいだに黒猫がいる (medu nima crna maca: ツルナゴラ「モンテネグロ語」といえば、不仲を意味する。夜世界と昵懇な黒猫はキリスト教圏の魔女のお供、恰好のイメージシンボルとして定着しているし、ポーランドの黒猫は八年で悪魔になったりもした。

### ちよっどの距離感

そのように好まれ嫌われる猫を観察することで得られる知見もある。眼前で「猫を好奇心が殺した (curiosity killed the cat: 英語)」のを教訓に、藪をつつくのをやめようと思うかも知れない。かつてある港では、猫が踊り、夕刻に崖から身投げして行くのを見た住民が、異常事態を確信した。猫



峰山にある金刀比羅神社(「こんびらさん」)の猫猫。丹後ちりめん発祥のこの地で、猫は守り神だ(2017年)

ン語」と諺がいい、一九九六年の民営化まで英国鉄道がケープル警備にと二〇〇匹の猫を雇っていたように、人を守るものとしての猫の存在がある。養蚕地では、丹後峰山の金刀比羅神社に猫猫がいるように、家々を守ってくれる猫がありがたい。彦根のゆるキャラ「ひこにゃん」のモデルとなった猫が雨中の井伊直孝を招き入れた世田谷の豪徳寺をはじめ、日本各地の寺社が起源を相唱える招き猫だって、客や財、延いては福を呼び込んで人を助ける。和歌山電鐵貴志川線のウルトラ駅長「たま」は、廃線に直面した当路線を救い、今でも貴志駅のたま神社で「たま大明神」として、「ニタマ(たまⅡ世)」スーパー駅長や伊太祈曽駅の「よんたま」

たちを捕まえ、実験をし、そうして病理の究明が進んだ。猫踊り病、後世にいう水俣病は、猫が踊らなかつたらもつと被害が甚大になっていたかも知れない。量子力学のコペンハーゲン解釈では、箱のなかを観察しない限りシュレーディンガーの猫の生死は永遠に闇のなかである。だが、バンドラの箱を開けなければ、問題解決の希望すら得られない。九つも命をもつという猫は、ときに、死することでも人を救ってきているのだ。自分は日月を切り落とす、天地を粉塵して不可思議の太平に入りつつ、序目なくて、「らしい」ではないか。

世界各地で男性の欲を満たしている薄暗い猫の家 (cat house 【II 売春宿(遊廓)】) は時代が下つて数を減らした。近年の日本では、日夜明々とした猫カフェや、長閑な猫島といった空間が、癒しを求める老若男女に人気を博している。発情期に裏庭で嬌声を上げては冷や水で追い払われる猫も、次第に、庭とともに住宅街から消えていった。野良猫は都会から離れ、飼い猫もロクロク散歩に外出できない時代になりつつある。人間本位の生活にやや強引にとり込まれ、自由と反抗の象徴であった猫から、肝腎な自由が奪われつつある。

これ以上、猫の反感を買ってはならない。手を引っ搔かれて顔が腫れ上がったことのある一介の猫好きとして進言したい。ブラジルの蝶が羽搏いてテキサスが竜巻に見舞われるように、松明を結われた「猫の尻尾で街が焼き尽くされるような (Dose sumaiçae sahar qhulum juan: プルシヤスキー語)」

豪徳寺には、福を招いた実績をもつ「招福猫児(まねぎねこ)」が奉納されている(2017年)



出来事は、いつどこで起こるかもわからない。各地では、野良化した捨て猫が「外来種」として生態系に爪を立てた。

### 高遠なネコの世界

多世界解釈のシュレーディンガーの猫は、命を賭して、見られるたびに世界を倍々に増やす。だけど、どの世界でも猫はきつと、犬のように他者のためには遊ばず、愛らしく、気儘で、自分だけのために遊ぶのだ。そうあるべきなのだから、そうあらせよ。人は猫を道具にはできない。対等で上々なだから、高望みをやめよう。K・チャベックが猫から高尚な人生の閃きを買ったように、E・T・A・ホフマンや夏目漱石が見識高い猫の語りを代筆させて貰ったように、人は猫から迂遠な恩恵に与るくらいがちよっど良い。そんな猫と人のつきあひを見つつ古今東西を横切れば、それもまたひとつの寄せ絵になる。



「ねこ」の語源は諸説ある。よく寝ているから「寝子」というのも、「ねー」と鳴くから「ねこ」(「わんこ」「べこ」に同じ)というもある(2008年)

# エジプトのネコの女神「バステト」

肥後 時尚

関西大学大学院博士課程  
関西大学国際文化財・文化研究センター  
リサーチ・アシスタント

カイロの裏通りを歩くと、路上や石垣を気ままに歩くネコに遭遇する。現代のエジプト人の生活に溶け込むネコは、古代のエジプトでも身近な動物であったと同時に神聖な動物として崇められた。ネコの女神バステトは、古代エジプト人が抱いたネコに対するイメージを知る手がかりとなる。バステトは通常、ネコの姿、あるいはネコの頭をもつ人間の姿であらわれ、バステティス（カイロの北東約八〇キロメートル、現在のテル・バスタ）を中心としたエジプトのさまざまな場所で崇拜された。バステトは、初期王朝時代（前二世紀〜前二七世紀）から登場し、王や死者を保護する役割を担った。しかし、時代の経過とともに人気を博し、その姿や役割を変化させてゆく。



カイロの裏通りを歩くネコ (2017年)



バステト (Bst) 表記の2例。エジプト語で「フバステティスの女性」の意味をもつバステトは、ネコの女神でありながら、ネコと関係する象形文字は使用されていない

ももとはライオンの女神？

バステトといえば、ネコの姿を思い浮かべることが多いだろう。しかし、初期の資料には、雌ライオンの姿の女神にバステトの名前が記されている。ももともバステトは、ライオンの狩猛さと母親の優しさをもち併せた女神であった。しかしその後、セクメトやマヘスといったライオンの姿をもつ他の神々に凶暴な性格を譲ったのか、中王国時代（前二世紀〜前八世紀）にはネコの姿でもあらわれるようになり、穏やかな女神の一面が強調されることとなった。

ネコとしてあらわれたバステトの性格は、しばしば雌ライオンの女神セクメトと対比される。セクメトが凶暴性や戦争、病疫を司る荒々しい女神であるのに対して、バステトは穏やかさや保護、女性の多産性を象徴する女神であった。これは、エジプト人がネコとライオンに抱くイメージをそのまま女神の性格に反映したものであろう。時代は下るが、プトレマイオス朝時代（前四世紀〜後一世紀）の「アଙ୍କシエシオンクイの教訓」には次のような興味深い一節が記されている。「男が没薬を嗅ぐとき、その妻は彼に対してネコとなり、嘆くときには雌ライオンとなり、



バステト女神像 (ニュー・カールスバーグ美術館、末森薫撮影、2017年)

る」。古代エジプト人の女性に対するイメージは、現代にも通じるような優しさと厳しさを兼ね合わせたものだったのかもしれない。

空前の「ネコブーム」から現代へ

エジプトの神々のなかでも古株のバステト女神であるが、エジプト第三王朝時代（前二〇世紀〜前八世紀）になり、最大の転機を迎える。王朝の首都がバステト信仰の中心地、フバステティスへと移ったのである。これにより、バステトは王公認の神としての地位を確立し、絶大な人気を博すこととなった。まさしく空前のネコブームである。そして、その後もバステトは、古代エジプトの宗教が終焉を迎えるまでの一〇〇〇年以上にわたって、妊婦や幼児を保護する身近な慈愛の女神として人びとの生活に溶け込み、愛され続けたのである。現代のエジプト人がもつネコへの親近感は、ひよっとすると古代の愛情の名残なのかもしれない。

## 猫をかぶった人形たち

井上 章一

国際日本文化研究センター教授

嫌われた招き猫

招き猫は、今日ちよつとしたファッション・グッズのひとつになっている。コレクションをしているという人も、いなくはない。手招きをする猫の人形が世にあらわれたのは、一九世紀のなかごろであった。『武江年表』

(第九巻)が、一八五二(嘉永五)年の記録に、そのことを書きとめている。浅草三社権現脇で、「泥塑の猫」が売られ人気を集めていた。ただし、「心ある人は用いず」とも、のべそえている。

玩具研究で知られる有坂與太郎は、『郷土玩具大成第一巻東京編』で、「こう書いた。招猫を迎える階級は主として娼家に限られている」と。一九三五(昭和一〇)年の指摘である。井伏鱒二は『駅前旅館』(一九五七年)の主人公に、こう語らせた。「ちかごろ、たいていの飲屋で招き猫を置いてるね。やっぱこれ流行かね」と。この質問に店の女将は、「こたえてる。街の顔役におし付けられ、「嫌で嫌でたまらないけれど飾っている」のだ、と。



土人形 (H0013847)

縁起棚の人形

招き猫は、一九世紀中葉に、芸娼妓とかわる店へおかれだした。嫖客を招く縁起物として、縁起棚へかざられることからは、はじまっている。そのため、一般社会からは、いやらしい物として、なごらく敬遠されてきた。しかし、二〇世紀のなかごろには、渡世人らの手も介して、花街の外へ広まりました。例えば、酒場などに。それは、売買春の場から世間へ広がった置き物に、ほかならない。



張り子人形 (H0014427)

ろう。

「猫をかぶる」という慣用句の語源も、そこにある。生殖器崇拜の内裏を、猫の外被で糊塗した歴史に根ざしているとわたしは考える。コレクターにつげるべきかどうかは、判断がむずかしいのだが。

一九世紀までの遊里では、縁起棚へ男根の模造品をおいていた。生殖器崇拜の典型というべきか。遊女たちは、男の一物を象った造形物に、手をあわせていたのである。いい客が来ますように、と。西洋との交際がはじまってからは、その取締りがきびしくなる。幕府も明治新政府も、本格的な摘発にのりだした。招き猫には、その代替品として、同じ縁起棚へおかれていったという一面がある。男根から猫への移行期に作られたとおぼしき遺物も、なくはない。招き猫を手にもち、上へ引っぱりあげると、下から男根模型が出てくる。そんな細工物も、見たことがある。これなどは、文字どおり「猫をかぶった」ケースの、その代表例である。

# 国芳と猫

津田卓子 名古屋博物館学芸員

猫はかわいい。その気持ちは江戸時代の人も同じだったようだ。

とりわけ猫好きとして知られ、浮世絵の作品が多く残っているのが江戸時代後期の浮世絵師歌川国芳である。弟子が描いた敵めしい肖像からは想像しにくい(図1)、つねに五、六匹の猫を飼っていて、懐に入れた猫に物語を聞かせながら絵を描いていたのだ、愛猫の死にあたり、戒名を付け位牌を飾った(図2)の愛猫家らしいエピソードが伝わっている(図3、猫を抱える国芳自画像)。さすが暮らしをともしにしていただけあって国芳は良く観察しており、ちょっととしたしぐさや表情など生き生きとした猫の姿を写しとっている。

## 江戸時代の猫ブーム

その国芳が描いた猫の浮世絵が天保二(1831)〜三(1832)〜四(1833)年ごろ、ブームとなった。このと



図1 落合芳幾「国芳死絵」【図はいずれも名古屋市博物館(高木繁コレクション)蔵、杉浦秀昭撮影、2004年】



図2 歌川国芳「浮世よしづくし」部分

き描かれたのは、当時評判をとっていた見世物興業(鞠の曲芸)を擬人化した猫で描いたものや、歌舞伎役者の似顔絵を「猫顔」で描いた役者絵などである。また、おこまという猫の波瀾万丈人生(猫生?)をテーマとした小説の挿絵も描いており、そこでも役者の似顔絵猫が登場する。擬人化猫ならぬ、擬猫化役者絵ともよびたいものだ。例えば少し時代が下る作例だが、「流行猫の戯 おしゆん伝兵衛 身の臭姪色時」(図3、弘化四「一八四七」年ごろ)では、お俊を演じる四代目尾上梅幸と白藤を演じる四代目中村歌右衛門の似顔絵を国芳は猫顔で描いている。

最近ではスマートフォンで自分の顔を、猫などの動物に変換できるアプリがあるが、それを歌舞伎役者(有名人)でおこなったというわけ。ちょっと想像してみてもほしい。あなたの好きなアイドルや俳優の顔が猫顔になったら……と。話題になる

## 野生からペットへ

——ネコと人の共存を求めて

### キャットハンター

今から三〇年前、わたしはアフリカ南部のカラハリ砂漠の大地を歩いてきた。弟子入りしていた現地に暮らすサン(ブッシュマン)のハンターと数匹の犬と一緒に。カラハリ砂漠は見渡す限り地平線からなる平坦地であり、大海原のなかにいるような錯覚を起こす場所だ。わたしは、ハンターのすぐ後ろでかなり前方を歩く犬の動きを注視していた。すると、一匹の犬が走り出した。何かの獲物を追っているようだ。それは、犬に追い詰められて樹高一〇メートル余りある木の上に登った。野生ネコだ。ハンターは木の棒を投げてネコを木から落としてから、犬がネコにくらいいつているあいだに棒で仕留めた。捕獲したネコは村まで運ばれてから解体された。肉は自家消費されて、毛



狩猟で捕獲された野生ネコ(1987年)

### 池谷和信

民博人類文明誌研究部

皮はバッグの素材として使われていた。

その後、わたしは世界中の狩猟採集に従事する村をまわってきたが、飼い犬は多く見られても、飼いネコはアマゾンの村などを除いては見えない。それは、ものの本にあるようにネコの家畜化は農耕と関係するということを示しているのかもしれない。ネコは、数千年前に西アジアにて貯蓄した農作物を食べにくるネズミを退治するために家畜化されたという。近年の研究では、野生と家畜ネコの遺伝子がほとんど変わっていないことからネコの方から家畜になるのを選んだともいわれる。また、西アジアからアフリカにかけて野生ネコは四亜種が広く分布するが、このうちアフリカを中心に生息するリビアヤマネコが家畜化されたのだという。カラハリ砂漠の村の場合は、野生ネコは生息しているが、現地では農耕は盛んでないので家畜ネコにする必要がなかったの

### 野生の残るペットネコ

現在、世界的に見るとネコはわたしたち人類にとってペットとして欠かせない時代に入っている。日本でも、一五歳以下の子どもの数より犬とネコを加えた頭数の方が多いいわねるが、大都市では犬よりネコ

のも当然ではないだろうか。

### 猫絵のニーズ

さて、この天保期が契機となって擬人化猫絵擬猫化役者絵は、明治に入ってから描きつがれていく。一過性のブームで終わらず定番画題となっていくのである。ここで浮世絵があくまでも「商品」であることに目を向けたい。版元(出版者)としては、売れるものを作るはずである。商売に敵しい彼らが、ニーズを見込んだからこそ制作され続けたといえる。つまり、単に国芳ら浮世絵の作者たちが、個人的に猫好きだったからだけで出版されたものではないだろう。

それだけニーズがあった、つまり猫が江戸時代の人びとに親しまれ愛されていたからにほかならない。国芳の浮世絵からは、今もむかしも変わらぬ「猫愛」が見えてくるのである。



図3 歌川国芳「流行猫の戯 おしゆん伝兵衛 身の臭姪色時」



高いところが好きで、ジャンプが得意。ペットネコにも野生が残る(2017年)

の飼育数が多くなっている。亡くなったネコのお墓などからも、家族の一員としてのネコの位置が見えてくるだろう。一方で、ノラネコをめぐるのは国内の各地で評価がわかれている。宮城県石巻市田代島のようにノラネコと観光を結び付けている地域もあるが、鹿児島県奄美大島ではノラネコがアマミノクロウサギを捕食するというので駆除が検討されている。ここでは、放し飼いのネコが野生化してノラネコになっているので室内での飼育を求める人もいる。

このように、現代社会は、野生ネコ、家畜ネコ、ペットネコが多様に共存する時代である。これらの三つのネコと人とのかわりの歴史に思いを寄せてみると、ネコは人をもどくように見ているのだろうかと考えてしまう。我が家でも二匹のネコ(サラとユズ)を飼っているが、なついているのは餌を与えている妻のみである。ペランダにセミが入っていると追いかけてまわすネコ。ネコは家畜化をへて数千年を経過したものの、野生性を失っていない。ネコの生き方を見習いたいものだと思っている。

# 黒猫と魔女

小林 繁子 こばやし しげこ  
新潟大学准教授

## 悪魔の化身としての猫

足首を立てない密やかな歩行、暗闇で光る眼。猫、とりわけ闇に紛れる黒猫は神秘的・魔術的な存在とみなされてきた。ヨーロッパで魔女の存在が確信されていた時代には、魔女はもちろんのことその相棒たる猫も「迫害」を受けることがあった。特定の祝日に猫を入れた袋を火に投げ込む、火をつけた猫を追いかけて回すなど、今日の愛猫家が卒倒しそうな猫虐待の慣習がヨーロッパ各地にあったのである。

中世以来、悪魔はときに猫の姿であらわれると信じられた。一五世紀の美しい彩色写本挿絵には、「異端者（ワルドー派）の集会」としてしっぽを立てた猫の尻に向かって人びとが礼拝する様子が描かれている。忠実で誠実な犬が神や教会に背く異端者に向かって吠えかかるのに対し、猫は狡猾な悪魔の眷属、または悪魔そのものとされたのだっ



上：悪魔の化身として崇拜される猫（1469年）  
（出典：黒川正剛『図説 魔女狩り』河出書房新社、2011年、23頁）  
下：魔女集会に参加する猫の目が不気味に光る  
（出典：Wolfgang Harms *Deutsche illustrierte Flugblätter des 16. und 17. Jahrhunderts*, Bd. 1, S. 315.）

た。魔女も夜中に秘密の集会をおこなうと信じられたが、ここでも猫は魔女たちを魔女集会に運び、妖術をおこなうときに付き添うという役目を負っている。魔女集会を描いたエッチング（二二五年）を見ると、フクロウや蛇と並んで、梢の上や木の根元にもあまり愛らしくない猫の姿がひっそりと描かれている。「側に常々仕えるは／気味の悪い動物ども／ネコ、ヘビ、カエルにフクロウたちが／おぞましい叫びをあげる」のだという。

## 性のシンボル

魔女と猫のもうひとつの共通点は、性的なイメージだろう。魔女は悪魔と性的に交わり、キリスト教の性道徳も踏みにじると考えられた。魔女集会はそうした狂乱の性の宴でもあったのだ。発情期の猫が夜半に上げる唸り声は、恐るべき性欲の象徴であった。一六世紀のドイツの画家バルドゥンク・グリーンは靈惑的な肉体をもつ魔女の絵画を多く残しているが、外見的な美しさは内面の背徳性を映し出しているのだ。一六世紀に出版されたピラに、こんなエピソードがある。おしゃべりに夢中になったアントウエルペンの商人の娘が貴族の



右：バルドゥンク・グリーンの描く妖艶な魔女（1523年）  
（出典：黒川正剛『図説 魔女狩り』河出書房新社、2011年、77頁）  
上：娘の遺体は猫に姿を変えた（1583年の木版画）  
（出典：Wolfgang Harms *Deutsche illustrierte Flugblätter des 16. und 17. Jahrhunderts*, Bd. 7, S. 287.）

ように気飾って鏡に向かっていると、悪魔が彼女の首をひねり上げ、彼女は死んでしまう。後日彼女の遺体の入った棺を運ぼうとするが、不自然に重い。蓋を開けてみると彼女の遺体はなく、猫が鏡とともに飛びだしていき、悪臭だけが残されたという。外見の美に捕らわれた娘の魂が悪魔のものとなったという含意なのだろう。これは猫と女性の外見的美しさ、その背徳性が結びつけられた例である。黒猫と魔女のコンビは現代ではアニメ作品などを通じてすっかりおなじみだが、そのはるか遠景にはこうしたネガティブなイメージがあったのだ。

# 成年で絵馬でネコ

内田 吉哉 うちた よしや

民博機関研究員

国立民族学博物館が所蔵する標本資料のなかに、ネコが描かれた日本の絵馬がある。絵馬とは本来、神仏に願いをかけるうえで本物の馬を奉納する代わりに、馬を描いた絵を用いたことから始まったものとされる。また成年の正月を迎えたこの時期、神社で干支である犬を描いた絵馬を見かける機会も多いことだろう。だが、絵馬なのに馬でも干支でもなくネコ。その理由を、当館の資料を紹介しながら探ってみよう。

## 働くネコ

ことわざに「ネコの事も借りたくない」などといわれてしまうように、一般にネコはあまり何かの役に立つ動物だとは考えられていない。しかし、かつて日本で養蚕の



宮城の絵馬は後ろ姿。裏には大正13年の年記（H0157139）



岩手の絵馬。裏には願主の名前と明治39年の年記（H0020332）

盛んな地域では、蚕をネズミの被害から守るためにネコが飼われ、ネコも立派に働いていたのである。こちらに掲載した、岩手県と宮城県の絵馬をご覧いただきたい。岩手県の絵馬は、願主が自分で描いたらしい味のあるネコの絵である。宮城県の絵馬では、首輪代わりにヒモを結んでもらったネコの後ろ姿が描かれる。

両者ともに養蚕が盛んであった地域のもので、ネコは生活に欠かせない存在であった。しかし、なかにはネズミをとるために必要なネコがうまく育たない養蚕農家もあり、そのような場合に、自家のネコが無事に生育するように願をかけて絵馬を奉納したとされる。

## 捧げられるネコ

一方で、なぜ絵馬にネコが描かれたのか、理由が不明なものもある。例えば、魚を見つめるネコを描いた青森県の絵馬がある。青森県では、津軽地方にネコの絵馬がよく見られ



青森の絵馬。板を釘で打付けた素朴なもの（H0015691）

るといふ。青森や秋田では、「ゴミン（カミサマ）」とよばれる民間巫者に卜占を頼み、お祓いのために絵馬を奉納する風習がある。その際に、絵馬にネコの絵が描かれることが多いというのだが、その理由は判然としない。

## 家族としてのネコ

もちろん、現在と同じくペットとして家族に可愛がられたネコの絵馬もある。東京都の絵馬は、中央区日本橋にある三光稲荷神社にかつて奉納されていた



東京の絵馬。たまというネコの名前が記される（H0157212）

ものと考えられる。この神社は、行方不明になった飼いネコが帰ってくる霊験があるとされ、無事に愛猫が戻った際には、ネコを描いた絵馬を奉納したという。都会のなかの小さな社殿で、今となっては絵馬を奉納するスペースもないのだが、現在でも失せネコ帰宅の祈願を受け付けており、願いが成就した人によってお礼の招き猫が奉納されている。

働いたり、捧げられたり、家族の一員であったり、ネコの人生もいろいろある。

〇〇してみました世界のフィールド

# 聴導犬は人生のパートナー

い い ず み な お こ  
飯泉 菜穂子  
民博 人類基礎理論研究部



聴導犬について調べてみました  
聴導犬の英語名称は「Hearing dog」(2016年)

今年の干支は「戌」。いぬは遠いむかしから、わたしたちの暮らしに役立つ忠実で頼りになる仲間だ。ペットとして飼われることが増えた現代の日本においても、その本来の性質を活かして活躍する盲導犬や介助犬などの補助犬がいる。年末年始展示イベント「いぬ」の開催にあわせて、まだあまり知られていない「聴導犬」の実際について調べてみた。

## 聴導犬とは

聴導犬は、聴覚障害者に生活上必要な音を教え音源へ誘導するよう訓練を受けた犬である。日本では一九八一年より育成の試みがスタートした。現在では、視覚障害者の移動をサポートする盲導犬、肢体不自由者の日常生活動作をサポートする介助犬とともに、二〇二



犬種指定はなく、保護犬等のなかから適性のある犬を選定・訓練する(2017年)

年に施行された身体障害者補助犬法に基づき訓練・認定されており、二〇一七年二月時点で、全国で七一頭の聴導犬が実働している。候補犬の多くがいわゆる保護犬である。犬種に特に指定はなく、実働している聴導犬には小型犬も大型犬もいる。現在では、候補犬は二年ほど育成機関(全国に約二〇の機関がある)の訓練士が自宅で飼いながらつけた後で希望者(ユーザー)と引き合わせ、合同訓練のちに引き渡し、認定試験合格後に聴導犬となるのが一般的であるが、ユーザーの飼いたい犬を訓練して聴導犬とするケースもある。

## 音を教える

聴導犬の主たる役割は聴覚障害者には聞こえない「音」をユーザーに教える(音がしていることを伝え必要に応じて音源まで導く)ことである。すべての音ということではなく、「事前に訓練を受けている音」を教える。どんな音を事前に訓練するのかについては、ユーザーのニーズに基づいてカスタマイズする。

代表的なのは玄関のチャイム音、電話の呼び出し音、火災報知器の



聴導犬について知ってもらうための講座での様子。前足でユーザーの足に触れ音の発生を知らせる(2017年)

日本 ★

の音を聞いてもユーザーに教えることはしない。ユーザーの生活や職業に特化した音(例えば職場が学校である場合、授業開始・終了時のチャイムなど)も訓練を受けていけば教えるに来る。

その他の訓練を受けていない音(人や車が近付いてくる音や雷や強い風等の自然音、テレビの音量など)は教える対象ではないが、聴導犬が普通に「反応」することで、ユーザーが状況を確認する手がかりになることも多い。

また、聴覚障害は一見ただけではそうとはわかりにくいのがひとつの特徴であるが、聴導犬は(試験に合格した証である)「聴導犬」と書かれたケープを着用しているため、ユーザーの聴覚障害を周りに



ユーザーが会議や食事をしているあいだは待機する(2017年)

## 聴導犬は体の一部

聴導犬は身体障害者補助犬法によって公共施設や交通機関、飲食店、病院、従業員五〇人以上の職場などへの同伴受け入れを拒んではならないとされている。ユーザー側にも、ユーザーと補助犬は厚生労働大臣の指定法人で認定を受けること、ユーザーは補助犬の衛生や健康、行動について管理することなどの義務が課せられている。しかし、法の施行から一五年が経過しているにもかかわらず、飲食店への同伴拒否などの実例はまだ多く、ユーザーや育成機関が、聴導犬への理解を社会に広めるための広報活動に力を注いでいる。

ユーザーにとって聴導犬は人生のパートナーであり、耳の代わり・身体の一部である。聴覚障害者が社会活動をおこなうための「生きた補装具」と表現するユーザーもいるほどで、聴導犬を拒否されるということとは自分自身を拒否されたことになるといえる。

犬の寿命は人間よりも短く、どこかの時点で聴導犬を引退する日が来る。引退後は、ユーザー宅でペット犬として余生を送るケースが九割近いという。二代目、三代目の聴導犬を選ぶ際にも、先代と同居することを前提に相性に配慮するという。ペット禁止のマンション住まい(聴導犬は身体障害者補助犬であるため例外となる)では引退後に一緒に暮らすことができないため引越しをするユーザーもいるとのこと。聴導犬とユーザーの絆の深さを感じるエピソードである。



ユーザーの外出にももちろん同行する(2016年)

「見える化」するという役割も担っている。多くのユーザーが聴導犬を伴っていたおかげで、列車が止まってしまった際の緊急アナウンスを居合わせた方に筆談してもらえた……というような経験をもっている。

年末年始展示イベント「いぬ」 会期：1月30日(火)まで 会場：本館展示場 ナビひろば

開館40周年記念特別展

「太陽の塔からみんなくへ」  
70万博収集資料」

1968年から1969年にかけて「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」が世界の諸民族の仮面、神像、生活用品を収集しました。収集活動にかかわる書簡や写真とあわせてコレクションの生い立ちを紹介します。これらの資料は、70年大阪万博で太陽の塔（テーマ館）の地下に展示され、現在、みんなくの貴重なコレクションとなっています。

会期 3月8日(木)～5月29日(火)  
会場 特別展示館



假面(韓国)

みんなくゼミナール

日時 1月20日(土)13時30分～15時(13時開場)  
会場 本館講堂  
定員 450名(当日先着順)  
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)  
第476回

木彫り熊からアートモニュメントまで

五十嵐聡美(北海道立近代美術館)  
貝澤徹(木彫家)  
岡田恵介(公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構)  
齋藤玲子(本館准教授)

10代で熊を彫り始め、80歳の年にJR札幌駅のアートモニュメントのメインとして、アイヌの長老の像、エカシ像、クリムセ(弓の舞)を制作した藤戸竹喜氏。さまざまな立場から、企画展の趣旨と作品の魅力について語ります。



JR札幌駅の「エカシ像 クリムセ(弓の舞)」(イランカラッテキャンペーン)

みんなくウィークエンド・サロン  
研究者と話す

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなくの展示資料について分かりやすくお話しします。」

1月7日(日)14時30分～15時30分  
本館第5セミナー室  
「数」をあらわす——音言語と手話言語  
話者 菊澤律子(本館准教授)  
相良啓子(本館特任助教)

1月14日(日)14時30分～15時 本館第3セミナー室  
トナカイの角  
話者 卯田宗平(本館准教授)

開館40周年記念企画展  
アイヌ工芸品展

「現れよ。森羅の生命——  
木彫家 藤戸竹喜の世界」  
熊をはじめとする北の動物たちからアイヌ文化伝承者の等身大の彫像まで、藤戸竹喜(1934)の主な作品をとおして、創作活動の軌跡とその背景をたどります。

会期 1月11日(木)～3月13日(火)  
会場 本館企画展示場



「ふくろう祭り ヤイタンキエカシ像」  
2013年 鶴雅リゾート(株)蔵  
撮影 露口啓二

関連イベント  
アーティスト・トーク

藤戸竹喜氏が作品について語ります。  
日時 1月11日(木)14時～(30分程度)  
会場 本館企画展示場  
※申込不要、要展示観覧券

年末年始展示イベント「いぬ」

2018年の干支である「いぬ」をテーマに、みんなく所蔵の資料や写真を展示し、世界各地の「いぬ」を紹介します。

会期 1月30日(火)まで  
会場 本館ナビひろば

みんなく映画会・第39回ワールドシネマ  
「テレビジョン」

厳格なイスラームを遵守するバングラデシュの小さな村の騒動をとおして、宗教と現代文明のあり方を考えます。

日時 2月10日(土)13時30分～16時30分  
(13時開場)

みんなく映画会・公開セミナー  
「渡り鳥と人のかかわり」(仮題)

北東アジア地域の渡り鳥と人のかかわり方を、生き物の視点から、映画や討論会をとおして紹介します。

日時 2月11日(日)13時～16時  
(12時30分開場)

会場 本館講堂(定員450名)  
※申込不要、要展示観覧券  
※入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布

展示場クイズ「みんなく」総集編

これまで実施した「みんなく」の中から、「衣食・住」に関する問題を集め、出題します。

期間 1月30日(火)まで  
場所 本館展示場  
※全問回答した方に記念品進呈

連続講座

「みんなく×ナレッジキャピタル  
フィールドワークを語る」

開館40周年を迎えたみんなくの展示を生み出すもとなつた、数多くのフィールドワークについてお話しします(全6回)。

会場 グランフロント大阪北館1階  
ナレッジキャピタル「カフェエラボ」  
※要事前申込、参加費500円(1ドリンク付き)、定員各回50名  
主催 国立民族学博物館  
一般社団法人ナレッジキャピタル  
株式会社KMO

「ソースコムユニティの人々との資料熟覧  
博物館収蔵庫でのフィールドワーク」

日時 1月10日(水)19時～20時30分  
(18時30分開場)  
講師 伊藤敦規(本館准教授)

「世界の屋根」で言語を求めろ」

日時 1月24日(水)19時～20時30分  
(18時30分開場)  
講師 吉岡乾(本館助教)

お申し込み・お問い合わせ先  
一般社団法人ナレッジキャピタル  
06-6372-6530

カレッジシアター  
「地球探究紀行」

※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、  
参加費1000円、定員各回50名  
主催 産経新聞社  
共催 近鉄文化サロン、スペース9  
特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団

「みんなくの台湾研究」

日時 1月10日(水)13時～14時30分  
講師 野林厚志(本館教授)

「マイナス30度の世界に生きる  
狩猟民チユクチの暮らし」

日時 1月24日(水)14時～15時30分  
講師 池谷和信(本館教授)  
会場 あべのハルカス25F「貸会議室C」  
お申し込み・お問い合わせ先  
ウエーブ産経カレッジシアター係  
06-6633-9087

●年始の開館のお知らせ

年始は1月5日(金)から開館します。  
※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。  
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室 ※当日先着順(定員96名)  
会員無料(会員証提示)、一般500円  
※1月、2月の講演会の登壇者が変更になりました。

第473回 1月6日(土)13時30分～14時40分  
タヒチとイースター島——楽園と崩壊の対比  
講師 印東道子(本館教授)

ポリネシアの多くの島は10世紀ごろまで無人島でした。大陸から遠く離れたこれら熱帯の島々には、食用できる植物はほとんどありませんでした。それを楽園のような環境に作り変えたのは、海を越えて西から移住してきたポリネシア人でした。島という限られた自然環境に移住するにあたって、どんな準備や工夫をし、楽園とまで呼ばれた環境を作り出したのか、あるいは失敗したのか、タヒチとイースター島という対照的な例を紹介します。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会(40分)をおこないます。講師が長年発掘調査を続けているミクロネシアの島で発掘した、約1000年前の土器や釣り針、貝製品などの出土遺物をご覧いただけます。

第474回 2月3日(土)13時30分～14時40分  
日本文明の夜明け——梅棹忠夫と三内丸山遺跡  
講師 小山修三(本館名誉教授)

一九九三年に発見された三内丸山遺跡の六本柱の巨大モニュメントは、小規模な狩猟採集段階にあったとされていた縄文時代の社会の在り方の再考をつなぐました。梅棹忠夫はこの遺跡を訪れたあと、「都市的性格が強くその中心となったのが神殿であった」と述べました。日本の歴史を文明という一本の線上で捉えようとする、この大胆な仮説の成立過程とそれがその後の研究の展開にどのような影響を与えたかを考えます。

※講演会終了後、講師を囲んで懇談会(40分)をおこないます。

東京講演会

第121回 1月27日(土)13時30分～14時40分  
カザフの食と儀礼——ひとの一生を彩る草原の恵み  
講師 藤本透子(本館准教授)  
会場 モンベル御徒町店4Fサロン※事前申込(定員60名)

第77回体験セミナー  
植物から博物学の世界を知る

東京大学総合研究博物館見学  
2月24日(土)【申込締切 2月9日(金)】

刊行物紹介

■公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 編  
『現れよ。森羅の生命——  
木彫家 藤戸竹喜の世界』

千里文化財団  
1,800円(税別)

アイヌ民族の彫りの技を受け継ぎながら、熊や狼、ラッコやシャチ、北に生きた先人たちの姿を木に刻み、繊細さと野性味が交差する独自の木彫世界を築いてきた藤戸竹喜の作品を紹介する。



■広瀬 浩二郎 著

『目に見えない世界を歩く  
——「全盲」のフィールドワーク』

平凡社  
820円(税別)

障害当事者の立場から盲人史研究に取り組み、現在は独自の(触文化論)を展開する人類学者がその半生を軽快に綴る。

「全盲」から考える社会、文化、人間。目が見えないからこそ見える世界とは。



1月21日(日)14時30分～15時 本館第7セミナー室  
音楽を展示する試み  
話者 寺田吉孝(本館教授)

1月28日(日)14時30分～15時30分  
本館第3セミナー室→中国地域の文化展示場  
フィールドワークの醍醐味  
——雲南省大理での30年を通して  
話者 横山廣子(本館教授)  
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)  
ただし、7日(日)、14日(日)、21日(日)は展示観覧券不要

## 想像界の生物相 狼男

東京大学教授 いけがみ しゅんいち  
池上 俊一



資料名 | 民衆本「狼男と吸血鬼魔女との結婚」  
フランクリン・マシャード著、J・ボルジェス画

標本番号 | H0113171

制作年 | 1980年2月

地域 | ブラジル

サイズ | 縦16cm×横11cm

### ◆◆ヨーロッパの狼男像の変遷◆◆

満月の夜に森のなかや荒野で狼おおかみに变身し、蛮行を働くという狼男の伝説は、ヨーロッパ各地に広く伝わってきた。すでに古代ギリシャには、アルカディアの王リュカオンが、人肉をゼウスに供した罰として神によって狼に変身させられたとの言い伝えがあったし、中世初期には、ゲルマン民族の主神オーディンに死者の軍勢として仕える者たちが狼の姿をまとったばかりか、特定の犯罪（殺人、墓暴きなど）を犯した者がアウトローとして氏族の生活圏の外に放逐されるときにも、狼になったと看做みかされた。ヨーロッパで狼男がもつとも人気を博したのは、一二〜二三世紀の宮廷世界においてであった。当時、周期的に狼に



ルーカス・クラナッハの木版画「狼男」1512年

变身することを宿命づけられた騎士が文学形象として登場し、この男（狼男）は悪辣な妻の犠牲者で、知性も徳性も兼ね備えたキリスト教道徳と正義の護持者としてもはやされた。

だが中世末から近世になると狼男の評価は一変する。それは魔女や妖術師が悪魔と契約を結び、その力を借りて狼に变身した存在だと考えられるようになったのである。子どもを貪り食うなど恐るべき残虐行為にふける狼男の存在が、魔女裁判で白日の下にさらされ、フランスの裁判官アンリ・ボゲは狼男を次から次へと火刑に処した。

### ◆◆新大陸でのハイブリッド化◆◆

このように、ヨーロッパ内でも時代によって狼男のイメージは大きく移り変わったが、新大陸へともち込まれると、さらなる変容を遂げたようだ。民博の所蔵資料のひとつである民衆本「狼男と吸血鬼魔女との結婚」からそれは窺うかがわれる。

洗礼前の子供たちの血を吸っていた吸血鬼と、次々人を殺していた狼男は、別々に「狩り」をしていたが、たまたま出会うと敵ではなく友として一緒に狩りをしよ

うという話になり、ついに結婚してしまう。残忍な気味の悪さもあるもののどこか滑稽で、掲載の版画がその感じを強めている。墓掘り人やマテ茶採集者の登場、馬や犬をはじめとする動物たちの集合など、生活の香りもプンプンしてくる。

それもそのはず、本作品は一九七〇年代から八〇年代にかけて、ブラジルとりわけその北東部で盛んに作られ青空市などで売られた「リテラトゥーラ・デ・コルデル」、すなわち「ひもの文学」（市などでひもに掛けて売られた安価な冊子本。起源は一九世紀後半にある）とよばれる民衆本のひとつだからである。一六世紀のコンキスタドールによる征服後、ブラジルや他の中南米諸国には、ポルトガル人、スペイン人の植民者・宣教師によって、キリスト教的な妖術・悪魔観念がもたらされたものの、同時に先住民の土俗的な呪術信仰との相互作用も起きた。一六世紀後半には多くのアフリカ人が奴隷として連れて来られて、さらに別種の魔術観念が加わった。「ひもの文学」にあらわれた狼男も、こうしたハイブリッドな観念群に連なるものではなからうか。

ともに「記憶」の名が付いたペルーのふたつの博物館。同じテロリスト、同じ国軍による暴力を扱っているはずなのに、二館で受けた印象はそれぞれ違った。その違いはどこからくるのか。設立者の違いだけではないその理由をさぐる。

風光明媚にして古代文明の揺籃の地である南米ペルーは、一九八〇年から二〇〇〇年にかけてテロリズムの嵐に巻き込まれた。経済の破綻と貧困の拡大は、極左集団の登場を促し、それに対抗した国軍による暴力も蔓延した。「真相究明と和解委員会」が政府に提出した最終報告書によれば、犠牲者は六万九二八〇人にのぼった。こうした負の歴史を公共空間でどのように扱い、描くのかはペルーのみならず、地球上のさまざまな地域における大きな課題でもある。

### 民主主義の視点

二〇一五年、首都リマの高級住宅地として名高いミラフローレス地区にその暴力の時代を扱った施設「記憶の場所——寛容と社会的包摂」が開館した。コンクリートの打ちっ放しの現代的な建物ながら、施設名称を示すプレートは地味である。一階では、暴力の時代をペルー社会の歴史のなかに位置付け

もある。ペルーの政治家、新聞記者、哲学者、人類学者、博物館学の専門家による展示コンセプトや設計についての討議には、強制収容所の展示や平和教育に通じたドイツやポーランドの専門家が招聘された。また最終案は、暴力の犠牲者にも開示され、その意見をもとに修正も加えられた。さらに施設名称には、暴力の記憶を過去の遺物ではなく、生成し続け、よりよい未来社会を描くための糧とするという意味を込めたという。

ともかく民主主義を絵に描いたような過程を経てできた施設である。それだけに歴史を学ぶ場としては評価できる。しかし、どことなく現実感に欠けているように思えたのはどうしてだろうか。

### モノのもつ伝達力

それは、無差別テロ集団であったセネデーロ・ルミノソン（「輝ける道」の意）結成の地である中央高地アヤクチョ市で訪れた別の博物館での記憶があるからかもしれない。ANFASEP 記憶博物館「繰り返されないために」がそれである。ANFASEP とは「ペルー誘拐・捕縛・失踪者家族の会」の頭文字をとった NGO 組織であり、二



「記憶の場所——寛容と社会的包摂」の外観(2017年)

るとともに、犠牲者の遺族や加害者の家族の証言映像が繰り返し流れる。モノの展示はほとんどない。二階は、暴力に対抗した市民運動を扱う。現在、人権侵害や汚職の罪で収監されているアルベルト・フジモリ元大統領を暴力の時代の最後の主役と位置付け、それ以降を民主主義の時代と宣言している。首謀者の逮捕などテロ撲滅の功績をた



ANFASEP 記憶博物館外観(2014年)

〇〇五年にペルー政府や人権団体、国際協力団体の支援を受けてこの博物館を開館させた。雑居ビルのような建物の二階がその場所であり、お世辞にもきれいとは言えない。しかし、建物の外壁には暴力の時代を象徴する壁画が鮮やかに描かれている。この団体のメンバーが自ら筆をとったという。テロの巣窟であったアヤクチョ地方では、テロ集団ばかりでなく、テロ撲滅の名の下で国軍による不法逮捕、拷問、そして虐殺が横行した。博物館の展示でも暴力の時代の歴史を振り返り、国軍が使用した、ロッカーのように狭い拷問用の収容ボックスのレプリカが置かれている。また収監された無実の青年

たえられることの多いフジモリだが、それも不当逮捕や虐殺を許したからできたのだという論理である。そして三階で、暴力の犠牲者への奉納品を美術的に飾ることで展示を終える。

テロの終結から二〇年にも満たない現在、民主主義は確立しつつあるとはいえ、暴力の時代に対する評価は定まっておらず、大統領選のたびに政治問題化される。そのようななかで、パランスよく展示をまとめ上げている、というのが第一印象である。

創設過程も興味深い。二〇〇八年に創設準備が開始されるのは、ドイツからの資金供与の申し出があったからで



犠牲者の証言を流す映像に見入る来館者(2017年)

が母親にあてた手紙、虐殺時に身に付けていた衣服、収監中に使用したみすぼらしい食器が飾られる。そして最後には、この組織を立ち上げた犠牲者の遺族たちの闘争が写真パネルで示される。「記憶の場所」のような洗練された展示はひとつもない反面、現実感に満ちあふれている。

この小さな博物館が、国立の巨大な施設以上に伝達力をもつとするならば、それはモノを主体においた展示によるのだろう。そして、犠牲者遺族による壁画や展示制作への直接的な関与も、展示に力を与えている。国立にせよ、私立にせよ暴力の時代を無色透明の歴史に貶めないための展示の葛藤は続いている。



暴力の犠牲者の若者の衣服と、遺族が抗議に使用した布製横断幕(2014年)

# 服のパターン、手芸のパターン

平芳裕子 神戸大学准教授



図1 ファッション・プレート。1854年の“Frank Leslie's Ladies Gazette of Fashion”より。Images courtesy of Fashion Institute of Technology | SUNY, FIT Library Special Collections and College Archives

ファッションデザイナーのアトリエから趣味の洋裁、家庭科の授業などでもおなじみの「型紙」<sup>パターン</sup>。その歴史を女性誌などからひもとくと、手芸と女性との接点が浮かび上がる。

そうしたなかでも、ヨーロッパの服飾は異なる特徴を示してきた。歴史的には一四世紀ごろから衣服のスタイルに変化が見られるようになり、流行の装い、すなわち「ファッション」が上流階級からとり入れられた。西洋では布よりもむしろ体を基点として、ボディラインを美しく造形する服作りが好まれた。ここで特に重要となるのは、平面の布をいかに立体的な身体に沿わせるかという点である。

## 仕立屋の秘技

具体的に見てみよう。服を作るための布地は矩形が多いが、人間の身体表面は曲面である。そのため（伸縮性に乏しい）布地で体にぴったりと沿う衣服を作るには、裁断と縫製の作業が欠かせない。このとき、

身体を四肢や胴体など部位にわけ、それぞれの部位に即した形に布地を切りとり、縫い合わせ、立体的な服に仕立てていく。その際、身体は動くものであるから、衣服と身体の間には適度にゆとりをもたせながら、個別の体型に即した服を作る。この作業の根幹となるのが布地の裁断であった。それは専門的な知識と技術を有する仕立屋の仕事であり、また彼らの作業や教育に重要な役割を果たしたのが「パターン」であった。

パターンとは、布地の切り方を示す型のことである。印刷された図や切りとられた薄紙など形状はさまざまであるが、服作りのための手段であり道具であるため、古いものはあまり残っていない。歴史的な衣装のパターンを知るためには、縫い合わせられ

## 手本どりの仕事

ところで、この服作りのためのパターンに先行して、女性誌で人気を博していた特集がある。それが手芸である。刺繍や編み物、装飾小物のイラストに加えて、その作り方やパターンが掲載された（図3）。日常的な家事労働であった「裁縫」とは異なり、「手芸」は女性たちにとって趣味や教養を兼ねた楽しい仕事であった。しかし手芸にしろ裁縫にしろ、どちらも「パターン」、すなわち手本に倣う仕事であったことに変わりはない。手本に忠実であること。この「型どり」の振舞いが、良き女性の作法とみなされていたのである。

た衣装をほどこして布の形を確かめるしかない。だが一六世紀末に出版された書物から、昔のパターンの様子をを知ることができる。かなり大雑把な形が描かれているにすぎないが、逆にこのようなガイドさえあれば、裁断は格段に容易な仕事となった。だからこそ、パターンは仕立屋の秘技として親方から弟子へと受け継がれたのだ。

**画期的な女性誌の付録**

このパターンが専門職人だけではなく、家庭の主婦にまで広く普及したのがアメリカ力である。ヨーロッパにあるような伝統的な仕立屋がなく、また国土の広いアメリカでは、発展した交通機関や通信手段がパターンの普及に大きな役割を果たすことになった。一九世

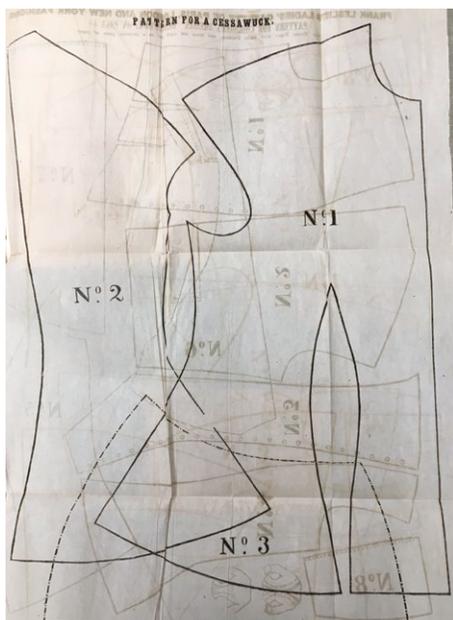


図2 女性用胴着（ボディ）のパターン。1854年の“Frank Leslie's Ladies Gazette of Fashion”より。Images courtesy of Fashion Institute of Technology | SUNY, FIT Library Special Collections and College Archives

紀には女性誌に流行のスタイルを描いたファッション・プレート（服飾図版）が登場し（図1）、さらにその制作方法を解説したパターンも掲載されるようになったのである。のちにパターンは綴じ込み付録になり、雑誌や専門店による通信販売も始まった（図2）。

手もちの服からパターンをとったり、近所の器用な女性やドレスメーカーに裁断を依頼したりしていた。「裁縫」はほぼ唯一の女子教育であったから誰でも縫えたが、布地の裁断は難しかったのである。流行の衣服とともに、その作り方を示すパターンが身近な雑誌に掲載されるようになったことは、画期的な出来事であった。紙面に印刷されたパターンを写しとれば、あとは布地を切って縫うだけだ。パターンを求めて、女性たちは最新号を心待ちにした。パターンの人気は



図3 手芸のパターン。裏面に印刷された裁縫のパターンが透けて見えている。1854年の“Frank Leslie's Ladies Gazette of Fashion”より。Images courtesy of Fashion Institute of Technology | SUNY, FIT Library Special Collections and College Archives

編集後記

新春恒例の干支シリーズは、昨年一回りした。今年はその番外編ということで、干支になれなかった動物である猫をとり上げた。猫が干支になれなかった理由はネズミに騙されたというよく知られたものから諸説あり、国によっては干支に含まれることもあるとか。特集を組むなかであらためて感心したのは、猫好きな方の猫にささげる熱量だ。もっとも、本館で開催中の年末年始の恒例イベントである干支展「いぬ」にかかわる人から話を聞く限り、犬好きのそれも負けていないか。犬を飼っていたことはあるが、ペット自体に興味のない小生からすると、ほとんど異文化である。(丹羽典生)

月刊みんなぱく 2018年1月号

第42巻第1号通巻第484号 2018年1月1日発行

●表紙：本館所蔵の猫たち

前列右端から、一文人形 (H0013959)、土人形 (H0107962)、人形 (H0107961)、土人形 (H0014686)、相良人形 (H0011189)、塑像 (H0224068)、花巻人形 (H0011416)、張り子人形 (H0014244)

次号の予告

特集

企画展「現れよ。森羅の生命——  
木彫家 藤戸竹喜の世界」関連

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子  
編集委員 丹羽典生(編集長) 寺村裕史 三島禎子  
南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一孝 長岡綾子  
制作・協力 一般財団法人千里文化財団  
印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に  
お願いします。  
\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」 「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料) から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんなぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>



名は星をあらわす(?)

What's in a name?

み お ゐのろ  
三尾 稔 民博 グローバル現象研究部

インド西部の農村で初めて滞在調査をしたとき、とまどったことのひとつは子どもの名前が頻繁に変わることであった。学校に上がるころまでが特にそうで、デヴィ・ラールと聞かされていた男の子が、一週間くらいして別の人から「いやいや、この子はデヴィ・ナーラーヤンさ」などと言われることが結構あった。筆者がからかわれていたわけではなく、実際に子の名がころころ変わるのである。

インドには日本のような戸籍制度はなく、出生届けをいつまでに役所に出すという決まりはない。子の名は両親や家族、親戚、ときにはその知人たちが好みや呼びやすさで思い思いに決め、いくつかの呼び名のなかから何となく周囲の合意ができて、その子らしいものが決まってゆく。この世に生まれた無垢の存在は、周囲と関係をもちながら次第にかけがえない位置を得てゆく。子どもの名が時間をかけて固まってゆく過程は、人が人格を得てゆくプロセスそのものように思える。

とはいえ、命名が周囲の好みだけでおこなわれているのか、というところでもない。そこにはもうひとつ大事な要素として星占いが絡んでくる。

インドは占星術学部のある国立大学もあるし、多くの政治家が占星術師を雇って活動の指針を相談するなど、伝統的な星占いが大切にされている。庶民(特にヒンドゥー教徒)のあいだでも星占いは大事で、例えば結婚縁組の成否は最終的にカップルの星回りの相性で決まることが今も多い。いくら他の相性が

よくても星回りが合わないと思われても、個人運勢を司るのはわたしたちにもなじみ深い一二星座宮だ。しかし、欧米や日本の星座は当人の誕生時の太陽と星座宮の位置で決まるのに対し、インドの場合は誕生時の星座宮と月の位置で決まる。この位置関係は頻繁に変わるので誕生時刻に近い者どうしても星座が異なることはよくあり、暦を読み込まないと個人の星座はわからない。子どもが生まれると親はバラモン階層に属する星占いにわが子の誕生時刻を告げる。星占いは暦を見て、その子の星座宮を教え、誕生時の二星座宮と月や太陽、惑星の位置関係を示した図を描いてくれる。この図はジャンム・パトリといい、将来の縁談や詳細な運勢占いに役立てられる。

このとき星占いはその子に適した名前の子音も教えてくれる。星座ごとに個人名の最初の子音がいくつか決まっているのである。名付けはこれを手がかりに、神々や神話にゆかりがあり、かつ人びとが好ましいと思う名からなされる。逆にいえば頭文字から当人の星座がわかり、簡単な運勢占いもできるわけである。こうして人の名は運勢を支配する星座に、いわば「タグ付け」されることになる。

インド西部のヒンドゥー教徒の命名の過程には星や神々の世界と、現世の世間が両方かかわり合っている。しがらみが多くて大変そうではあるのだが、親たちだけで個人的な名をひねり出すより、案外含蓄に富む名付けのできるしくみといえるかも知れない。